

空



2015・6・7

SORA 61号

金魚玉

柴田佐知子

木の家に木椅子木の卓五月来る

目白来て忙しき木となりにけり

田搔きせぬ牛馬ばかりや草千里

火の山はみづから崩れ夏薊

捨てられし村に鯰の太りたる

螢火に身の幅ほどの橋かかる

細き枝に肉巻きつけて蝸牛

子燕の鳴かぬ頭の並びをり

母は亡き人を語りて辣蕪むく

汗の子の眠りて家の広くなる

大皿を蔵より運ぶ祭前

夕映えのとどまつてゐる金魚玉

夏帯や身にかへてなど言つたかしら

体内は蒼と思へり夜の秋

遠雷や背伸びしてとる薬箱

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

呼び名すぐ昔に戻る春野かな

穂高岳泛き水のやうなる夏夕べ

ふらここの揺れにまかせて告げにけり

花山葵水なめらかに外れゆけり

使はざる農具も手入れあたたかし

おもむろに白鷺歩む寺領田

笑ひ出すほどの大声新社員

白鷺の抜き脚に藻の絡まれり

幼子のすぐに着崩れどんたく隊

葉擦れふと心にひびく夕端居

父と居て母思ひ出す青時雨

何事もなきがご利益日々草

手の中でやはらかなる蕨かな

上げし手に梅雨の走れる乙女像

菖蒲湯の父にいくども声かけて

長崎 荒井千佐代

福岡 柴田志津子

朽ち船の底のふぢつば風光る

金印の裏見鏡や黄沙来る

魚市を覆ひて春の鳶・かもめ

防人の島置き去りに鳥帰る

サーカスの口から火噴く桜の夜

先生に負はれ遠足の最後尾

礫像に深き陰影花の昼

店先に花と積まるる春帽子

聖玻璃を春陽抜け来てレクイエム

石室は城の抜け道著我の花

復活祭観覧車より海を見て

無の一字刻む墓石鳥の恋

逢ひに行くその時よりの春日傘

鶏小屋のしづかな午後や立葵

海風が山風となる桐の花

街の子に貫はれてゆく目高かな

埼玉 服部 早苗

大人一枚きさらぎのすこし先

撫で肩の人どことなく春めきぬ

仰臥して喉かわきをり桜東風

花明りとはもしかして魂あかり

桜葉降る街道の精米所

菜の花にひそみて鳥の暮しせむ

腰かけてみればあたたか流木は

時に鳥ときに雲ゆく潮まねき

福岡 だいじみどり

飛んで来しあさぎまだらにどきどきす

夏シャツの鎖骨あらはな煙草かな

シャツターを降ろされてゐるつばめかな

おそはれし巣を遠くよりつばくらめ

巣づくりのここはやめたとつばくらめ

恋猫の蛇口の水を舐めてゐる

六道湖の風に飛びたる夏帽子

うれしさはあさぎまだらにあひしこと

福岡野上杏

北九州深川淑枝

白牡丹蕊立ち上るまで開く

雨を吸ふ檜皮の屋根や御開帳

葉桜の大根八方の地を掴む

残雪光大きく開けて秘仏の扉

春帽子戒壇院を出で来たり

花屑を鎖骨の窪に仁王立つ

火事跡にまだ立つけむり紫木蓮

花冷やくるるの瘦せし御堂の扉

囀りや井桁に積みし松の薪

水白く曳く瀬やのぼり鮎を待つ

ひたひたと生簀に潮や春夕焼

若鮎や雨上がりたる山の色

河口まで弟誘ふ月見草

川合に揉みあふ水や鳥帰る

月上げて櫻若葉の匂ひたつ

つばくらや雨きらきらと美濃の小田

兵 庫 戸 栗 末 廣

岸壁のどこからとなく春の水

咲き満ちて椿山とは昏かりし

老木に機嫌があると桜守

腕の子の平らに眠る花曇

柿を接ぐ一枝は父の墓に町け

生れたての赤子のやうな春の月

なかんづく水田に映る桐の花

笹舟のまつすぐ奔る子供の日



粕屋 吉田 葎

荒行を終へて此の世の桜かな
青年の雉子かもしれぬ羽ばたけり
とりあへず眼だけ出したる鮭五郎
あたたかや町をヨットの運ばるる
大都会丸ごと置きて鳥雲に

福甲 矢野 百合子

音もなく波の崩るる春岬
春愁や朱色褪せたる引揚碑
影のばし遅日の島に立つポスト
黒南風や未だ女人を拒む島
医者の手を知らずに逝けりうららけし

粕屋 秋 千 晴

末の子が母になりたる春日かな
退院の子にげんげ田の廻り道
薬屋の匂ひつきたる紙風船
風船がバスの天井つつきををる
青楓子の髪揺るる宮参り

長崎 松尾 龍之介

雄鶏に矜持の歩み牧開き
暖かや膝より白むコールテン
平和像褪せて霞の空の色
雷光を海に立てたり春嵐
鳶の輪を冠りて春の天守閣

福岡 あさなが捷

大仰にピエロ風船手渡せり

楠若葉高齢者へと区分され

もらひたる金魚の袋持て余す

足音を荒く神輿の先触れ来

番犬に嗅がれてゐたる蟻の列

福岡 山内 碧

信号を待つ間も弾む入学児

カーネーション活けられ家庭訪問日

鶯や山へ消えたる農夫の背

ぐづる児へ数珠を持たする蝶の昼

春火鉢片付け家の落ちつかず

福岡 樋口みのぶ

桃の花赤子の肌着前結び

教室の午後は眠たし養花天

目刺焼く猫のとり分加へみて

姿勢よき西郷どんや青嵐

雨のあと山の近づく鯉のぼり

大阪 田岡 千章

老人の天突き体操水温む

石臼に臍のありけり下萌ゆる

啓蟄やおんぶの脚のぶらりぶらり

春埃竈に罅の育ちをり

先生の声が先頭花菜道